

RIN

そこは硬くはないが、柔らかでもない、しかも狭い寢床だった。もつとずっと質の良いものをリンの体は知っている。けれど、これ以上のものはないとリンは目覚めるたびに思っていた。ただしここ数年ほどの間、とんでもなく酷い場所ですつと寝起きをしていたから、今では何処でも眠れる体と言えないこともなかったが。

その、この先も褪せるはずはない記憶と、感覚。それはこの揺蕩うような、それでいて心の底からリンを包む暖かさとは真逆のものだ。今はもう、自分はただこの暖かさの中へと全て任せてしまえばいいことをリンだつて分かっている。

だがそれでもリンの五感、未だ周囲の些細な変化も全て洩れさず脳へと伝えた。その感覚を受け取ると、例え深い眠りの中へ沈んでいようと頭の中も神経も、まるで静かな湖面のように、すつとクリアになってしまう。

そして今、少し前から何かが静かに、リンの髪へ触れていた。知っている。これはアキラの指先だ。だから微睡みの中に置くには鮮明になり過ぎた頭を抱えながらもリンはまだ、体を投げ出したままでいた。

昨日はカーテンを閉ざすのを忘れていた。いや、確かアキラは眠る前、いつもの少し怒った調子でそういうことを言っていたような気がする。だがいいじゃないかと自分が言って、なし崩しにしたのだったか？

ああ、そうだった。見晴らしのいいこの部屋の中を覗けるヤツがいるわけじゃなし。そんなリンの台詞と態度に、そういう問題かと言いながらもアキラは淡々流されたのだ。

何にせよ、古びたアパートの上階にあるこの場所に燦々と陽が射していることは、リンの緩やかに閉ざした瞼の裏側を白ませる日の明るさで知れていた。

自慢をするわけではないが、自分のこの金の髪が陽の光に透けるのは、中々いいものじゃないだろう。ちよつと前まで荒れ放題でばさばさになっていた髪だが、今ではすっかりそれは元の柔らかさと艶を取り戻しているように感じる。だからきつと、アキラもそれを指に絡め、その感触を愉しみながらずつと遊んでいるのだろう。

くると毛先を巻き取られ、梳くように撫でられる。

アキラに体のどこかへ触れられるのは、いつでも心地好くて、くすぐったかった。だからもう少し、いや、どうせなら今日は一日中でもこうしていられたらいいのと思う。

だがぐいと、少し強く髪を引かれた。寝た振りを続ける。だがアキラはそれに容赦せず、今度は数度立て続けに細い髪を引っ張った。起、き、ろ。

そんな声が聞こえる調子だ。それでも嫌だと言わんばかりに、まるで眠りの最中にいる人間が、単に身じろぐような動きでリンは腕に力を込めた。その腕は一晚中、アキラの腰を抱いていた。

そんな抱き枕のいる寝床にリンがケチを付けるはずがない。

「ほら、リン、いい加減に起きろよ」

「んー……やだ」

逃れようとアキラが体を振っているが、それに構わずまた強く腰を抱いた。アキラの温かい肌の感触はリンのお気に入りのお宝の一つだ。

「まだ寝ていても構わない。けど、俺はそろそろ仕事の時間だ。だから離せよ」

アキラはリンが戻る前からやっていた仕事をいまもまだ続けていた。詳しいことは知らないが、倉庫番とでもいうのか、資材の管理のようなことをしているらしい。楽な仕事かと思ったがそうでもなく、どちらかといえば力仕事になるようだ。以前、どうしてその仕事なのかと聞いたら、頭を使わなくて良かったからだと言った。アキラは薄く笑っていた。もしかすると、少しほかしたその言い方には何か意味があったのかもしれない。だがリンはそれ以上は尋ねずにいた。

内戦後、日興連のやり方を受け継ぐことになった二ホンの表面は、随分と落ち着いている。だが復興作業は後手に回してきたものが多い。だからアキラも裏方のような仕事とはいえまだまだ忙しくしているようだ。この先も、ずっとそれを続けるつもりというわけでもなさそうだが、とりあえずいまは体も動かせて、気楽にやれているのだろう。

ちらりと時計に目を移す。どうだろう？ あと三十分。それを越えると遅刻という頃合か。

「だって俺、まだアキラとこうしていたいし……」

「お前な……大体、ちよつと前から寝た振りしてただろ。いい加減にしろよ」

アキラはそう言うなり、指先へやや多めにリンの髪を絡ませると、そのままぐいと引っ張った。

「いったー！ いたた、何すんだよ、もー……しょうがないじゃん、だつてさー……」

やや体の向きを変え、アキラの腹の上に顎を乗せて怪訝そうな顔を見上げる。

「アキラのせいで、まだ俺、動けないんだもん……」

引き締まった腹の上に頬を当て、甘やかに囁きながらわざとらしく視線を流した。リンから視線を逸らすことはないものの、アキラのいつもの仏頂面には余計に拍車がかけられる。照れ臭さを無表情で誤魔化そうとするアキラは、可愛い。

「とかって俺に言われたつてさ、おかしくないよね？ き、の、う、の、は」

テンポよくまくし立てる。いつもの調子が出てきたところで、こちらもやはりいつものように、ひとつトーンを落とした声でいい加減にしろと呟かれ、誤魔化すようにリンは笑った。

「なにさー、このムツリスケベ」

小さくアキラが舌を打つ。

「揶揄うな。それに、」

「？ それに？」

「昨日のは、俺のせいじゃない」

つい口にしてしまったという風情でリンから目を逸らしたアキラを、ついまじまじと見上げてしまった。へらりと頬が緩む。ふふふふと声を立てて笑っていたら、何がおかしいと睨まれた。「それじゃあさ、まあ、昨日のはお互い様。ってことで」

ほんの少し、昨夜の余韻を引いた声音で囁いた。だがアキラには重めの溜め息を吐かれ、さらにそれは流される。どうやら自分のパターンに、アキラも慣れてきたようだ。これからはもう少し捻らなければと心の中で拳を握った。

「何でもいい。でも本当に、そろそろ起きろよ。俺は今から仕事だし、オッサンは今日も多分来るだろうし」

「んー、まあそうだねえ。しかし、あの胡散臭いオッサンが、ジャーナリストって——いまさうだけど、何て言うか、終わっちゃうてるよね」

「聞かれたら、一発くらい殴られるぞ」

そう言いながら、アキラの口元は笑んでいた。

本来、この部屋の持ち主は源泉だ。ただ本人が半年や一年のスパンであちこち飛び回るようになり、すでにここは源泉にとっては荷物置き場か倉庫でしかない。リンが戻ってきたことでアキラは此処を出るつもりでいたようだが、もっと手頃な物件を見つけたとかいう話で、結局二人へ

ここを譲り、源泉の方が出て行くことにしたようだ。それを聞いたアキラはもの言いたげにしていたが、リンは源泉のその好意を、ありがたく、そして遠慮なく頂くことにした。そして一週間ほど前から帰国していた源泉は、数日前から自分の荷物をこの部屋から運び始めていた。それでも生活に必要な細々としたものはそのまま残していくつもりらしい。だから荷物

といったところで大した量にはならないようだ。

「今日も、いつごろ来るかは分かってないんだよね？」

「少し仕事を片付けてからになるって言ってたからな。昼は過ぎるんじゃないか？」

「ふうん……」

「それよりほら、足付けるの——手伝ってやるから。いい加減に腕、放せよ」

左足へ義足を取り付ける作業は、もちろん手伝ってもらった方が楽ではあったが慣れもあり、多少時間は掛かったけれどアキラの手を借りずとも事足りる。

「ヤダ」

だからリンは少々おどけながらも本気の力を腕に込めた。アキラの視線はリンを睨付け、声や声を聞くたびに、リンの背筋は何故だがゾクリと粟立ってしまう。逆効果だ。

「だってさあ……足はアキラが出かけた後で自分でも付けられるし。だったらその分、時間が勿

体無いかなあつて——思わない？」

「そう思うなら、腕放せて。オッサンが来るんなら、少しは片付けもしとかないとマズイだろ」

足が一本足りないせいもあり、比べたことは無かったが、腕力だけならリンはアキラに勝るかもしれない。

「……鈍いなあ」

わざとらしくリンはやれやれと肩を竦め、片腕を解くとゆっくりと、アキラの体に手のひらを這わせた。二人の間に邪魔になるものは何も無い。それはまだ、アキラには馴染めない習慣らしかったが、肌同士を合わせたまま眠りたいのだとリンがそれをねだった後は、溜め息を吐きながらだがいとも諦めてくれていた。

上体を起こそうとするアキラを逃がすまいと、リンもアキラの胸の上へとずり上がる。

「まだあと少し、時間あるよね？」

ちらりと壁に掛けられたシンブルな時計に視線を送る。

「……動けないんじゃないのか？」

「動けないよ。今は俺、ベッドから動けない」

ずりずりとアキラの上を這うように体を上らせて、アキラの顔を覗き込んだ。案の定アキラの

表情の中には、不機嫌の仮面の下に押し込めようとしていたはずの、困惑と戸惑いが滲んでいる。あと一押し。

心の中でやりと笑い、だが表情はあくまでも柔らかいものにする。

「たまにはさ、明るい中で、アキラのイイ顔が見たいな」

囁いて、再び否やと言われる前に、唇を軽く合わせた。リンに体の上に乗られている体勢とはいえ、アキラが本気で抗えば押しのけることくらいできるはずだ。だがまだその気配はない。リンは片足をアキラの下肢へ絡め、ゆったりと腿から腹へ向かって手を這わせた。

「シンクの中の食器も洗濯も、後で俺が全部やつつくとよ。なんなら残ってるオッサンの荷物の残り全部、まとめて放り出しようか？」

「バカ。そんなことしたら、拗ねられるだけだろ」

アキラの手が、リンの頭に添えられた。そしてアキラはゆっくりとリンの髪を撫でながら、僅かに目を細めている。

「眩しい？」

リンの言葉にアキラは頷き、小さな、だがどこか嬉しそうな声でああと言った。

「カーテン、引こうか？」

「別にいい。このままで」

アキラの前髪を掻き上げ、現れた額に唇を落とす。

「アキラ。昨日の夜は、カーテン閉めろって怒ったくせに」

「……誰も見てない、って言ったのは、リンだろ？」

「まあ、ね。そうなんだけど」

アキラの頬、そしてくすぐったそうに閉じられた瞼の上にキスをした。するとアキラの腕はリンの頭をゆるやかに引き寄せて、耳朶に緩く齒を当てる。

「俺ね……やっぱりアキラに触られるの、好きだな」

そうかとアキラはリンの耳元で囁くと、再び髪へ指を絡め、梳くように撫でていく。

「朝、目が覚めて、天気が良くて眩しくて。アキラが俺に触ってて。気持ちよかった。だから今日は一日中、アキラといちゃいちゃしてられたらいいのにな、って思ってたんだ、俺」

そう言ってるリンはアキラの首筋をべろりと舐めた。アキラは瞬間息を詰め、その吐息を殺してしまう。それが惜しいと思ったから、アキラの首筋を舐め上げ、辿りついた耳殻を食んだ。

「……ッ」

今度は少し、声が聞けた。嬉しくなつて、もう少しと思つて体をずらしたその隙に、アキラの舌がリンの耳朶へ滑り込む。

「や、だ、アキラ、くすぐりたいよ」

「俺だつて、くすぐったかった」

「ン——、ほら、やられたらやり返す、っていうのはどうかと思うなあ、俺は」  
頭を引き寄せられたまま、アキラの下肢へと手を伸ばした。

「別にそういうつもりじゃない」

そんなことを言いながら、アキラの舌がリンのうなじから顎にかけ、輪郭をなぞるように這い、唇へ落とされる。

「……ん」

数度唇を合わせ、それから少し乾いたアキラの唇の表面をリンは差し出した舌先で舐めた。いき込まれる前に、舌先を触れ合わせる。

自分の舌でアキラの舌を舐める——というのは可笑しい表現かもしれない。だがそうやって目を合わせ、相手の様子を探りながら舌に触れ、そのうちに深く唇を合わせていくのがゾクゾクとしてたまらなかった。

「……ン、」

できるだけ声を洩らすまいとするアキラを煽るように、わざとらしく吐息を漏らす。

リンとアキラの肌の種類は少し違う。そのアキラの目許にほんのりと淡い朱が浮くことを確か

めてからリンはそつと瞼を閉じた。

口腔へアキラの舌を招き、吸い上げる。その後で舌を絡めると、今度はアキラがそれを引き出す。アキラの歯先が緩く当たった。甘く舌を咬まれながら、リンはアキラの体の上に乗せていた上体を脇へとずらす。

リンの髪へ触れていたアキラの手が、それに合わせてリンの背筋を緩やかに撫でた。小さな音を唇同士が立てて離れる。アキラの唇の端から滴っていた唾液を、舌先で舐め取った。

「俺、アキラに触れられるのも好きだけど、アキラに触るのも、大好きだよ」

アキラの雄へ手を伸ばす。瞬間、アキラの体は強張るが、リンの背を撫でていた手のひらはそのまま素肌の上を滑り、左腿の裏側を通ってリンの舐め端へと落ちた。

緩やかに、奇異なリンの傷痕の上をアキラの指が優しく触れる。度胸のない人間が見るにはあまり気持ちのいいものではないと思う。すでに癒えたその傷痕に痛みは無く、触れたところで感覚もあまりない。それでも剥きだしの傷痕をアキラに触れると、何故だかそこが熱を帯びていくようで、リンは少し嬉しかった。

いまでも、それはリンの勝手な思い込みなのかもしれないが、リンの言葉に自分もそうだとアキラが告げているような気がして、思わずその心地好さに息を吐く。

そしてリンがゆつくりとアキラの微熱を撫で上げると、アキラもリンを手の内へと包み込んだ。

「あ……アキラ」

昨夜の名残が熾火のように残っていたのだろうか。キスと、アキラに体を撫でられただけでリンの体はすでに熱を孕んでいた。比べても仕方のないことだが、互いの手の内にある熱の度合いはもしかするとリンの方が少し高いかもしれない。

アキラもそれを感じているのだろう。口元が僅かに綻んでいるような気がする。

「……すけべ。そういう顔がいつまでも出来ると思うなよ」

「そういうって、何だよ」

目を細め、いまに見ているとばかりの視線を投げると、アキラは僅かにたじろいだ。「俺、アキラの顔って大好きだけど、ベッドの中にいる時は、少し余裕が無くなってるくらいの方が、可愛いとか思ってたりの……知ってる？」

言葉に合わせ、手の中に収めたアキラの雄を緩やかに揉みしだく。

リンの台詞と手淫のどちらに不満があるのか知らないが、アキラはまた、くだらないとも言いたげな顔つきで思い切り眉根を寄せていた。だがそういう表情がいつまでも保たないこともリンは知っている。今だって、すでにアキラは唇の端を薄く噛み、何かにじっと耐えている。

「声。アキラの声、聞きたい」

アキラの唇へ指先で触れた。下唇をそつと撫でると諦めたともいう仕草で、ふうとアキラは

溜め息を吐いた。

最初から、素直になればいいのに。

そう思うのはしょっちゅうだ。だがそういう、自身の欲へありのままに従うことのできない性分も、アキラらしくていいと思う。しかし何より、溺れるように互いが相手を求めてゆく様は、体与えられる快感以上にリンを昂ぶらせてくれる。いま、自分もアキラも生きているのだということをいつもリンは実感するのだ。

そしてアキラの変わって行く姿は、とても扇情的だった。

「……く……ッ」

緩慢な愛撫の中、アキラの雄へと熱が集まり、緩かに立ち上がる。リンはその先端へ親指の腹を擦りつけた。漏れる吐息は無かったが、それを押し殺した拍子にアキラの喉が僅かに反る。

「気持ちいい？」

当たり前前ことを聞く。ああと小さな声が答え、リンの動きを真似るように、アキラもリンを愛撫する。リンの手も、そしてアキラの手も、先走る液で濡れていた。

手のひらのぬめりを塗り広げるように、アキラの幹を擦り上げる。

アキラの顔に落ちている、睫の影が柔らかい。額には薄っすらと汗が滲んでいる。この頃はトシマでアキラと出会った頃より、曇りの日が減ったような気がしていた。そして日差しは夏の、

日向では痛みさえ感じていたものでなく、いつの間にか円みを帯びていたことに今頃気付く。

「俺も、いいよ……アキラ」

言葉はもう、吐息とも喘ぎともつかないものが混ざり合ってしまったている。

アキラはどう思っているのか知らない。だがリンにだって最初から余裕があるわけではないのだ。抱き合いたいという欲求に、アキラよりも素直に靡いているだけのことで。

湿った水音が二人を煽る。もっと強く触れて欲しくて、だからアキラを追い立てた。

リンの手のひらの動きに合わせてアキラの息が荒くなる。ただリンも気を抜いた途端にアキラの求めるままに声を上げ、与えられる快楽へ夢中になってしまいうさだ。それがアキラも同じなのだということは、リンから視線を逸らすまいとしている、アキラの目を見ていれば分かる。

「すごい——アキラの、もういっぱい出てる……」

「そういうことを、言う、なっ」

「でも、そういうこと俺に言われるの、アキラ、結構好きだよね？」

睨まれる。だがそれは本当のことだ。少し意地の悪い視線をアキラへ投げると、黙れとでも言うつもりなのか先端を一際強く擦られる。

瞬間、それは達してしまいそうなほどの刺激で、リンは何とかそれをこらえた。

「俺も、やらしいこと、いっぱいアキラに言って欲しいんだけど、な……」

「は、……リン——」

わざと手の動きを弱め、一番アキラが好きな部分から遠ざかると、反射的にアキラの腰はそれをねだる動きで揺れる。にやりと笑う。アキラはしまったという顔をしてから、リンから視線を僅かに逸らした。

アキラより、恐らくリンの方が情事の手管には長けているのだろう。だがそれでも、アキラが触れてくれるというだけで満ち足りてしまう自分の方が分が悪いやな気がする。

「まあいいよ、そのうちで。だから今は——ね？」

これ以上は言葉を紡ぐのが辛い。アキラの吐息に触れるだけでも達してしまいそうだった。

アキラが荒い呼吸の中からリンを呼ぶ。限界が近いのはきつと二人とも同じなのだ。

「ね、アキラ、どうしたい……？ 俺、アキラと——」

一緒にいきたい。

耳元で囁くと、アキラの頭がそれに応えて縦に揺れた。

二人、喘ぎとも泣き声とも取れる声で互いの名を呼び、そして強い刺激を与えあう。

「……ッ、——あ、リン——っ、もう」

「アキラ、あ……ア！ すげ、いい——」

リンの手の中でどくとアキラの雄が生々しく脈打ち、自分の下腹部の熱が押さえきれずに弾



ける。手の中にアキラの精を叩きつけられながら、リンもアキラの手のひらへと滾った欲を吐き出した。全てを手の中へ受け止め合い、やっと吐けた深い息がひとつに重なる。それがどこ可笑しくて二人で笑った。

手のひらが粘つく。アキラの静まったばかりの雄が放ったもので汚れている。

どうせ昨夜の汚れもあつて洗濯はするつもりだった。だからリンはこれでいいかと汚れていないもう一方の手でシーツを手繰る。

だがくちやりと粘りのある音がして顔をそちらへ向けた。そしてリンは動きを止める。いや、止められてしまった。

そんなリンへどうかしたのかとでもいう視線を投げ、アキラが己の手のひらを舐めていた。手のひらで受けたリンの精を滴らせないようにしているのだろう。手のひらを傾けながらやや上へ向け、白い粘液をアキラの舌が拭っていく。指の間から覗く赤い舌がリンの白濁を掬い上げ、時折喉が上下に動く。つられてリンもごくりと唾を飲んでいた。

「どうかしたのか？」

結局アキラが手のひらの汚れを舐め終えるまで、リンはそれをぼうっと眺めてしまっていた。アキラはリンへ不思議そうな視線を送りながら、まるでこれで仕舞いとも、仕上げともいうような仕草で人差し指の先を軽く口に含み、ちゅつと軽い音などさせる。

「わかってんだけさあ……」

「だから、どうしたんだよ。リン」

アキラが小さく首を傾げる。本気で分かっているのだと思うと、何だか腹が立つてくる。ちらりと横目で時計を見た。あと十分。

「ねえ、アキラ」

悔しかったので、リンもまだ汚れたままの指先へちらちらと舌を出し、アキラの吐いた蜜液を舌の先だけを使って舐めた。アキラに比べその仕草は、随分とわざとらしく見えるだろう。だがアキラは時々、これくらいいなければ誘われていることに、そして自分の行為がどれほど淫らにリンの目に映っていたのかということにも気付かないのだから仕方が無い。

そしてそんなリンを見て、やっとアキラはばつが悪そうな顔をするのだが、遅い。

「遅刻。できるだけしないようにするからさ」

「お、まえ、だっていま……」

アキラの手を取り、リンが自分の雄へ導くと、アキラは信じられないとでもいう顔を見せた。流石にリンも自分の節操の無い体には笑ってしまう。

「ごめん。ほんっと、どうしちゃったんだろうね、俺」  
勝手に口をついた言葉にアキラが抵抗を止めた。

「ひよつとしたら、猛グツシュしなきゃなんなくなるかもしれないんだけど……でも俺、いまは  
すっごくアキラのことが好きってことで、さ」  
許してよ。

囁いて、キスをした。アキラのいつもの溜め息は、リンが唇で塞いでしまった。

\*\*\*

ビル風、というほどのものにはここにはない。ただこのアパートの屋上は見下ろせばそれなりの  
高さもあって、リンの頬を撫でていく風は強かった。ビルはこの辺りでは今のところ一番背の高  
い建物になるようで、リンの背丈よりも高く張られたフェンスの向こうには、視界を妨げるよう  
なものもない。ただ、今日はあまり空気が澄んでいないらしく、どこまでも遠く見渡せるかとい  
うと、そういうわけでもないのだが。

西側にある、角度の減った落ちていくだけの太陽を目を眇めて眺める。そろそろアキラが戻っ  
てくる時刻だろうか。

アキラの元へ戻ることが出来てから、リンとしては自分のペースで過ごしてきたつもりだ。恐  
らくそれは、他人が見れば飄々としてるようにしか見えないだろう。だが、ふと思えば返すと

リンなりに、真空になっていた五年間を埋めるために足掻いていたような気がする。

アキラとこの街で再会して、そして全てが終わったのだとリンはキツパリ口にした。口にする  
ことが出来た。あの時の心地よさは、今も鮮やかに思い出せる。

ただ知識のことも勿論だったが、精神と体のバランスのことを思ったとき、これがあるのまま  
の自分だと分かっている、やはりこれでいいのだろうか疑問を感じることもあるのだ。

ディバイドラインの封鎖されたトシマでの五年間、生き抜く、ということ以外でリンの頭の中  
にあったのは、アキラのことばかりだった。

そして今は——どうなのだろう。

その頃と比べ、自分の内側のいったい何が変わったのかリンはまだ分からずにいる。

ほんやりと眼下の景色を見下ろす。周囲の道路はそこに整備されていたが、車や人の通り  
が多いというわけではない。小奇麗でも洒落ているわけではなく、のんびりとしてさえ見える。

下町というのか、路地裏というのか、そういう人の営む匂いのする風景だった。

知らぬうちにまた引き締めてしまっていた頬を、ふっと緩ませると同時に、背後から人の気  
配を感じた。複数の足音がコンクリートの階段を鳴らしながら近づいてくる。

足音は二組。一つ目は音を吸収しやすいシューズなのだろう。残響の少ない規則的な足音だ。  
そしてその後に続くのは、だらしなく感じる調子が不規則に重い、だがそのくせ闊達さを覚えさ

せる妙な靴音。アパートには勿論アキラたち以外の住人もいるのだが、リンにはそれがアキラと、おそらく連れ立っているのは源泉だろうと直感した。

だから彼らがその姿を見せる前に、リンは体を返すとフェンスへと寄りかかった。がしやりとフェンスが音を立てた。それから昇降口へ向かって笑みを作る。

「遅ーい」

二人が現れ、そしてリンへと声を掛ける前に、リンは声を張っていた。

アキラと源泉は顔を見合わせ、リンの言葉に苦笑する。広さの無い屋上だから二人はたいした間も置かず、リンの傍へと歩み寄った。

「お帰り。アキラは早かったね」

「ああ、忙しいのは昨日がピークだったからな。それで、帰ってきたらオッサンに丁度会ったから」

アキラは源泉をちらりと見やり、リンの隣へと立った。

数日前、久しぶりに顔を合わせた源泉へとリンが最初に放った言葉は、「黒い」という一言だった。つい最近まで取り組んでいたという海外での取材のせいだろう。元々浅黒かった源泉の肌は、余計に黒味を増していたのだ。そしていま、源泉はリンの正面で口の端をいつもの皮肉な形へ曲げながら、目元にはくつきりと笑い皺を浮かべていた。

「お前な、俺が来るの分かってんのに、フラフラ出歩いてんじゃないよ」

顔を見て、何か一言来るなと思ったら、案の定言われた。しれつと舌を出して応える。

秋へと移ろい始めたばかりの日差しは、薄いカットソー姿のリンには心地好かった。だが厚手の仕事用のユニフォームには、暑苦しいのかもしれない。羽織っていた白の上着をアキラは重さを感じさせない動きで脱ぎ落とし、脇へ抱えた。すっきりとしたグレイのTシャツと、ジーンズの姿になる。

源泉はコノヤロウとリンへ向かって呟くと、シガレットケースを取り出した。それをリンは視線で制す。

「ああも、ちょっとオッサン、やめてよ」

「あん？」

煙草のフィルターを口に咥え、源泉が手を止める。

「俺の傍で吸わないでよ。ヤニの匂いに移るだろ。もしそれでアキラに嫌がられたりしたら、どう責任とるんだよ」

「別に俺は——」

「オッサンはさ、もうとつくの昔に麻痺してるから分らないんだろうけど。俺はねえ、初めてアキラの部屋に入ったとき、そこらじゅうに染み付いちゃってるその、オッサンくさい煙草の匂

いがそりやあもう嫌だった——って、確か前にも言ったよね」

リンの言葉に源泉が不愉快そうに顔を歪める。流石にアキラも咎める口調でリンを呼んだ。  
「そんな二人へしれつと舌を見せて応えた。」

「独占欲、強いから。お、れ」

にイ、と笑うとアキラの腰へ手を回し、引き寄せた。低い位置にあるアキラの瞳が強くリンを睨み上げる。

アキラの視線と、いまいましいとでも言いたげな源泉の視線を受け流しておどけた調子でリンは笑った。け、つと源泉が悪態をつく。

「ここは外だ。屋根もねえ。だいたいなアお前、どこでも俺に禁煙禁煙いやがって——つたく、死ねとでも言いたいのか」

リンの記憶にある源泉は、いつでも煙草を口に咥えていた。そして口にしなくとも、手元にそれが無くなるとそわそわとして落ち着かなくなる。リンからすれば病的ともいえるほどのチェーンスモーカーだった。その悪癖のような性分は、やはり未だに変えられずにいたようだ。

なぜかそれがリンには嬉しく感じられた。薄く笑う。

「そんなことくらいで死ねるわけないからさ、平気平気」

軽いリンの言葉だった。だが源泉と、そしてアキラの空気は少し静まる。

リンにはさほどの意味は無い言葉だった。けれど二人はその裏側に、リンがここへ戻るまでの五年間を勝手に読んだのかもしれない。源泉は苦笑するとそれもそうだと呟き、アキラは——いつものように、どこかもの言いたげな視線でリンを見上げた。

トシマで必死だった頃のことは、いまはまだ鮮明すぎた。我ながら中々壮絶な状況も結構あったりするのだ。気にしてくれているのは分かる。だがこればかりは口にしたいくないというよりも、アキラに聞いて欲しいと思えなかった。

だからこれまでも、話がそういう話題に及びそうになりアキラに視線を向けられるたびにリンは笑い、適当に話題をぼかしてきたのだ。いまだってへらりとした笑みを浮かべる。

「つたく、若いくせに細けえこと言ってるんじゃないやねえよ」

気詰まりにさえなりそうだった空気を破ったのは源泉だった。

「だいたいお前らな、まだてめえの家じゃねえってのに、小姑こぢまみてえに細かいこと言いやがつて」

確かにリンは部屋の中で、荷物をまとめている源泉に向かって口うるさく言っではいた。しかしアキラは特にはそういうことを気にしてはいなかったと思うのだが。

「ああ？ 知らんのか。アキラの方はリンより酷いぞ。口に咥えるだけだっつってんのに、それも取り上げちまうんだからな」

源泉は口にしていた煙草をシガレットケースへと戻した。

「あれ、そなの？」

初耳だ。

「無意識にな、俺が火イつけちゃうから、だとき。全然信用しやしねえ。オイチャンはたまらんですよ。ただ俺も、アキラはそういうことを気にするタチじゃねえと思ってたんだが——何のこたアない。リンがごちゃごちゃ言ったから、ってわけか。へー」

けつと源泉が靴の裏でフェンスを蹴った。太い針金で編まれたそれががしやりと揺れる。

アキラはいつの間にか腰を抱いていたリンの腕から抜け出して、一人だけ無関係だともいうような顔でフェンスの外を向いていた。リンはふうんと意味あり気な視線を投げる。だがアキラは気付かぬ振りでそれを流した。

「あんなうち、こつちから出てってやるってんだよ。パーカ」

そう言うのと、源泉はリンとアキラの額の辺りへそれぞれ拳をこつりと当てた。まるきり子ども扱いだと思ふ。だが笑っている源泉の顔が不快ではなかったからリンは拳を避けずに受けた。隣のアキラの顔つきも、心なし笑んでいる。

「しっかし、お前」

リンの額へ握り拳を当てたまま、まじまじと源泉がリンを覗き込んだ。

「……なんだよオッサン。見惚れてんの？」

「バカたれ。妙なことぬかすんじゃないってんだ。しかし……いやお前、ほんとにでかくなつたよなあ。トシマで遊んでた頃は、ええと確か、こんくらい——じゃ、なかったか？」

源泉は首を傾げながら、リンの額へ当てていた手を己の腰の辺りまで落とす。そして下へ向け広げた手のひらを、水平に振っていた。

「……馬鹿にしてんのかよ？」

じろりと源泉を睨みつける。ヘラヘラと笑っている源泉と、リンの視線は変わらない。

「ま、今は同じくらい、だがな」

同意を求めるように、源泉がアキラへ言葉を投げる。アキラは二人を見比べて、それから縦に首を振った。

「ふうん。そうだね。ま、背の高さは同じくらい、かなあ」

「あ？ 何が言いたい」

「いやあ、オッサンそれさ、俺とアンタじゃウエストの位置が全然違うつてこと、ちゃんと分かって言ってる？」

何、と呟き源泉はぐうと低く唸った。その表情は固まっている。鼻をふふんと鳴らしながら、リンは少し胸を反らした。トシマでこのオヤジをやり込めていた時の気分を思い出す。

「あ、案外……」

笑いたい。だがここは源泉を憐れみリンを止めた方がいいのか？ そんな風に表情を迷わせているアキラの腕をリンはぐいと強く引いた。

「ほら、アキラ。ちよつとこのオッサンの横に並んでみてよ」

「おい、リン！」

リンを咎めながらも、アキラはリンにされるがままに源泉の隣へと立った。

「あれー？」

アキラと源泉の腰の辺りをジロジロと見比べてから、リンは源泉へ皮肉をべったりと張りつけた顔を向けた。

「……」

源泉が本気でムカついている顔を見るのも久しぶりだ。

ふーっと源泉は重たい溜め息を吐いた。

これ以上、ガキに構っていられるか。そんな風に、自分の感情を落ち着かせるための溜め息だ。「黙って立ってりゃいい線だろうになあ。言いたい放題言いやがる、その小憎らしい口は相変わらずだな。大体、覚えてるか？ リン。お前さん、俺に借りがあるのを」

唐突に話題が変わる。源泉が覚えているかと言うのだから、きつとトシマでのことなのだろう。

だがあの頃、例え相手が源泉だろうと他人に借りを作るなど、まっぴら御免だとばかりにリンは過ごしていたのだ。それに源泉は情報屋だった。その基準は自己判定で曖昧なものだったが、取引の公平さにはその辺の雑魚以上にこだわっていた気がする。

「お前、俺から最後に買ったネタの分、まだ踏み倒してんだからな。うちの利息は高エぞ」

トシマで源泉とリンの間には、情報屋と客としての関係もあった。リンが源泉から情報を受け取る代価として、余ったタグを使う。そしてタグ以外にも、源泉が依頼を受けている別件での情報のネタをリンが渡してそれでチャラということもよくあった。

「はあ？ んな、情報屋なんてとくに廃業してるくせに、今頃持ち出してくるわけ？ 相変わらずがめついなあ。で、えつと最後に貰ったネタ……ネタ、ね」

瞬間、ずっとトシマで追いかけて続けたあの漆黒と真紅の色が、リンの目の裏に瞬いた。

「うんまあ、オッサンにしちゃ、いいネタだったかもしれないな。——覚えてるよ」

リンが主に源泉から集めていた情報と言われて思い出せるのは、シキのことばかりだった。

だから苦笑する。源泉も何かを察したらしく、それ以上はその話を続けようとはしなかった。ただリンは、横顔にアキラの視線を感じていた。

「なに？ オッサン、今更タグ欲しいの？」

「ンなもん要るか、バカ」

「まあねえ、タグ寄せさせて言われても、俺も流石にもうじゃらじゃら持つてないしな。そうだな……んじゃ、今度俺がオッサンの記事とか、ニホンの外の人間にも読めるように、訳したりとかしてやるうか？　そういうのも得意よ、俺」

「それくらい自分でやってる。馬鹿にすんな」

「何言ってるの。この前アキラから見せてもらったけどさ、あんな品の無い文章でダメ出しされたりしないわけ？　俺がさ、美しく華麗な文章に変身させてやったらさ、えとなんだっけ？」

首を傾げてアキラを見るが、肩を竦め、俺に振るなと返された。

「だからさ、とにかくなんちゃら賞とかだつて夢じゃないかもよ？」

ハア一つと源泉が息を吐いた。

「元の形してねえだろ、それ」

「んー、でもちよつといまの俺じゃあ、カメラ使つてオッサン用の特ダネ流してやるっていうのは、流石に厳しいだろうしね」

喪くしてしまった足のことを卑下しているわけではない。源泉の書いた取材記事をいくつかリも目にした上で、そういう方向にいまの自分に撮れるものはないだろうと端的に事実を言っているだけだ。ただ、しばらく触つていなかったが、カメラを持つのはやはり好きだ。

「そうかあ？」

だが源泉はのんびりとそれを否定する。

「案外、そうでもないかもしれんぞ」

「んー、そう？　でもそういうの、俺がマジメにやったらさ、オッサン、この仕事も廃業しなきゃ、かもよ？　ね、アキラ」

「かもな」

「言つてろ。ガキどもめ」

不意に温度の違う風が一陣、三人の周りに吹く。太陽が白さを薄め、橙の色を増していた。

さてと言つて曲げた首をこきりと鳴らし、源泉が二人へ背を向けた。

「そろそろ、お前らに最後のメシ作つてやるよ。台所借りるぞ」

「最後？　お、じゃあもう引越し完了つてわけ？」

まだ数日はかかるだろうと思つていた。だが源泉は、本当にあの部屋からは最小限の私物しか持つて行く気はないようだ。

「一応な」

「後からあれもこれも返せつて言つてきても、返してやらないけど？」

「んなケチなことあ言わねえよ」

肩越しに振り返つた源泉へと、リンはひらひらと手を振った。階段へ消える間際に、いつてら

つさーいと軽い声を掛けてやった。

「……でも、あんなこと言っというてさあ」

やや腰を曲げ、まだ源泉が去った方向を向いていたアキラの顔を覗き込む。なんだ？ とアキラの瞳が答えた。

「あのオッサン、どうせ暇があったらさ、絶対また来てるんじゃないかと思うんだよね」

フェンスに背を預ける。角度のつかない義肢へ負担をかけないよう、背中へ体重を乗せながら、ゆっくりと腰を下ろした。

「やだね。寂しい中年って」

傍に立つアキラを見上げると、アキラはだらうなと言って笑った。

「いいんじゃないか？ リンはオッサンのメシ、美味いんだろ？」

「まあね。でもアキラ、そういう言い方は良くないよ。アキラはもうちょっと、食べることに興味持った方がいいと思うんだけど」

アキラの、携帯食の類だけでも充分に生きていけるという態度は見ていてあまり楽しくないのだ。一人ならリンもそうなっているのかもしれないが、折角二人でいるのだからとリンは思う。とはいえ、食に対する興味が少ないのはアキラの元からの性分なのだろう。そう言われても、という表情でアキラは眉尻を下げた。

「大体、ちよつとでも要らない、って思ったら、人から貰ったもんだって勝手にポイって捨てちゃってるしね、アキラは。少しは物欲とかも持とうよ」

トシマでリンがタグと交換したものが入ったバッグを、捨てたとアキラがさらりと口にしたりと、きのことを思い出す。わざと恨みがましい視線を送った。アキラも同じことが頭に浮かんでいるようだ。トシマでリンが責めた時には短く詫びを口にしながらそんな気はさらさらないという顔をしていたくせに、今は随分神妙に、こくりと首を縦に振る。

「よし」

リンは短く言って笑った。

「あのさ、俺、確かにチビだっただろうけど、でもこんなだった？」

見上げながら聞くと、逆光のなかでアキラが首を傾げている。

「さあ？ でも、似たようなもんだったかもしれないな」

「……………」

少しだけ、源泉の気分が分かったような気がした。

だが不機嫌さを顔に表すリンに構わずアキラはリンの隣へ寄ると、同じように座り込んだ。それから顔をやや上へ向け、視線を空へ合わせている。

夕暮れにはまだ間がある。だがこれからは段々と、浮かんでいる白い雲が陽の色へ染められて

いくのだろう。

「相変わらず、高いところが好きなんだな」

視線は移さず、ぼつんとアキラが呟いた。

すつきりとしたアキラの目許をしばし眺め、リンもアキラが見ている方向へ顔を向ける。

「違ふよ。高いところじゃなくって、いや、高いところも好きなんだけど、俺はね、空——夜空とか星とか、そういうのを見てるのが、好きなんだよ」

「ああ、そうか」

「うん」

昔、こうして二人、高い場所から空を眺めたことがある。

あのときのトシマの空は真っ暗で、二人とも心は穏やかと言いたいものだった。けれど、あのときリンとアキラが感じていたのは、確かにいま、この時のような安らぎだった。

「リンを待っている間、気がつくときよくここに来てた。Bl@ssé<sup>ブラッセ</sup>er<sup>ァー</sup>も、よく眺めには行っていたけど」

「ふうん……でも、ここはあんましあの場所とは似てないよね。あそこはさ、コンクリートとかぼろぼろだった。トシマの中では結構マシな方だったけど。でも、フェンスとか、邪魔なものは全然無くて——」

アキラとあのビルの上で過ごしたのは、二回。だがそれを合わせても、きつと一時間にも満ちてはいない。それでもリンにはかけがえのない記憶だった。

ただ、トシマでそれを懐かしむにもあのビルの屋上は、片足を失くしたリンにとって、容易には辿りつくことのできない場所だった。少し前までそれを当たり前にか思っていた体が、あの頃のようにしなやかに弾むことはない。だからここへ辿りつくまで、何度も何度も繰り返し、リンはあの光景と、そしてアキラを夢に見ていた。

「そうだな。あそこの方がここよりももっと高かったし、星なんか見えなくても、見下ろせる風景がすごかったのは、覚えてる」

「うん。そうだね」

「でも俺は、今日みたいな天気之夜にはよくここで、あの時みたいに寝転んでた」

「へえ……そうなんだ。で、どうだった？」

アキラの横顔へ視線を戻す。毎日在必死に生きてきたリンとは真逆に、アキラには平穏が繰り返されてきたはずだ。リンが戻ってくることを、ずっと信じてくれていた彼を包んだ静けさは、やはり苦痛だったのだろうか。もしそうなら、リンと交わした幾つかの言葉や、そして残したままの体温は、少しくらいは慰めになっただろうか。

「どう、って……？」

リンの問うものが何なのかと、アキラの瞳も逆に問う。だからリンは思い出す。あのときのように、少しだけ声のトーンを抑え、だが軽やかに言葉を紡ぐ。

「ほら……何か色々、降ってきた？ 欲しかった答えとか、新しいアイディアとか？」

リンの言葉にああと短くアキラは答え、ふっと表情を緩ませた。

「……普段は思いつかないもの、色々？」

「そうそう」

「さあ……？ どうだっただろうな。ただここから部屋へ戻るときには、俺はこうするしかないんだっていうことだけ、いつも考えていた気がする」

「そう——俺もさ、一人であの街にいた時にはあんまり考える余裕とかなかったんだけど。けどやっぱり、アキラのところへ戻りたいって、俺にはこうするしかないんだって……思ってたよ。他の事を考える隙間なんて無いくらい。だからオッサンに借りがあることも、いままですっかり忘れてた」

もの寂しくなりそうだった雰囲気、小さく舌を見せて誤魔化す。そうかとアキラが呟いたから、そうだよとリンは軽く返した。

「借り、かあ……もう時効だよな。踏み倒してもいいんだろうけど。でも俺、そういうのって結構気になっちゃうんだよね」

アキラの視線がリンの左足を掠めた。だがリンは、それには気付かぬ振りをする。

ずっと、過去の自分が追い続けるしかなかった兄。この足を奪ったシキ。

リンへ貸し与えられた重い、雨の中で一層その刃を増していた美しい日本刀。それを全力で振るい、あの男を屠った時の、まだリンの手のひらに残っている——感触。

手のひらを開き、そして握りこむ。

「——俺」

深く肺へ空気を吸い込む。

「今から独り言、ちよっとだけ言ってみようかなあ」

そして息を吐き出すのと同時に、するりと言葉が滑り出ていた。

これまでずっと、アキラの視線を小ずるく誤魔化してきたくせにと、内心で苦笑する。

アキラは何も言わなかった。変わりに少し背に体重を乗せたらしく、フェンスが震えた。

「トシマで……アキラと別れる前にもアイツとのことは少しだけ話したよね？ 本当に、少しだけだったけどさ」

視界の端で、アキラの髪がそれを肯定するかのように微かに揺れた。

「トシマにいた頃、アキラと出会う前までは、アイツのことで俺の頭の中はいっぱいだった……。でも、アキラとケイスケに出会えて」

スナップ写真をばらばらと散らばせたように、その数日間が脳裏をよぎる。

自分もアキラも、楽しいとはとてもじゃないが言い難いことの方が多かった。アキラに自分が抱いた殺意も、少なくともその瞬間は、紛れもなく本物だった。

「――俺は、アキラに酷いことばかりした。それなのに、アキラは俺に、信じていいって言ってくれた」

それでも今、あの出会いには感謝の念しか抱けない。

「だから俺は、アイツときっちり決着をつけることが出来た。ただ正直その後は、大変なことが多くてさ、考えてる余裕って、あんまりなかったんだけど」

横目にちらりとアキラを見た。少しだけ、何かに耐えるように表情を歪めている。デイバイドラインの封鎖された後の旧祖地区きゅうそくの内部のことは、アキラも少しは聞き及んでいたのだろう。リンがアキラへその辺りのことを冗談交じりにも語りたいと思えないのは、こういう顔をアキラにさせたくないからということもある。

「だからまだ、今の俺も、あの頃の自分の本音っていうか、本当の部分……？ 何ていうか、ちゃんとした答えみたいなものをさ、はつきりとは見つけてなくて――」

シキに対する感情は、我ながら複雑だとリンは思う。

「ひよっとしたら感傷とか、こうだったらいいのにな、っていう思い込みみたいなものも、混ぜ

ちゃってるのかもしれない。けど……」

言い訳ばかりを先に並べている自分が、可笑しい。だがアキラは、それでも静かに頷いている。だからまた、リンは深く息を吸う。

途中まで組み立てて放り出していたジグソーパズルのピースを、また探し始めるような感覚だった。リンがその全体の姿を捉えることは、いつになるかは分からない。いまかもしれないし、ずっと先なのかもしれない。だがそれでもきつと、構わないのだ。

いまは、もう少しその作業を、進めてみようというリンは思う。

「アイツを――兄貴を、俺は」

あれから季節は移り変わり、だから当然目の前の空もその種類を違えていた。だがアキラと再会したときに似た、綺麗な色の夕焼けが徐々に広がり始めている。

そしてリンは、あの時アキラへ刀を渡した自分の気持ちを思い出す。不思議と胸のざわめきが治まり、落ち着いて言葉を紡ぎ出すことが出来るような気がした。

――大丈夫。もう全て、終わらせることが出来ている。

「アキラには、こうすることが俺のけじめだとか、枷かせを断つとか、そんな風に我が儘まま言って、行かせてもらったんだっけ」

「……ああ」

アキラは、苦笑と共に頷いた。

「アキラと別れて兄貴と最後にやりあう前にも、少しだけトシマに来る前のことを思い出したんだ。ホント、そのときにもさ、改めて大っ嫌いだっていうことが分かったよ。けどそのくせやっぱり俺は、アイツに憧れてたんだな、ってことも思い出してた」

利用され、裏切られ。仲間たちを殺されたときの、底無しの憎しみ。

だがそれよりもずっと以前からシキに対するリンの想いは心の奥深い場所から積もりに積もり、溜<sup>ため</sup>となって溜<sup>ため</sup>まっていたのだ。

「アイツは強くて——いや、本当に何だかって凄くてさ。だから俺は、気づいたときにはもうすっかり、兄貴を最高に尊敬してた。いつの間にか本気で、あんなれたら、って思ってた」

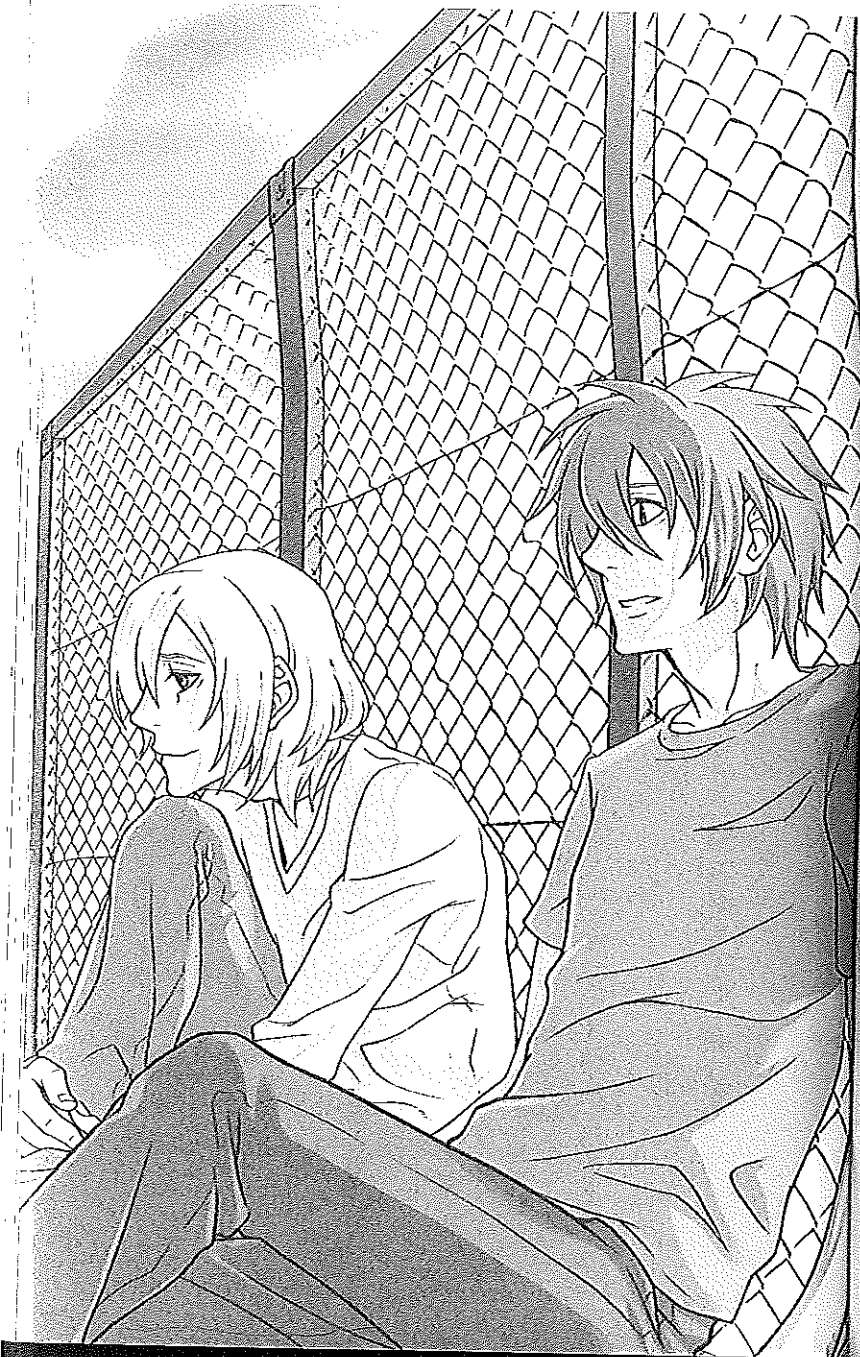
シキへの思いをありきたりな単語だけに当てはめることなど出来はしない。それでもいま自分が口にしたことは、紛れもなくあの頃のリンの内にあった一面だ。

「でもさ、少なくとも半分は、目の前のそいつと俺は同じなのに、いくら頑張ってみたところで、全然及びもしないんだ。それで——猛烈に嫉妬した。向こうは全く眼中に無かっただろうけど」

憎んで、嫉んでいたときの、ぐちゃぐちゃの感情がふとリンの胸をよぎる。

右膝を抱え込み、膝の上へ顎を乗せた。

「なのにやっぱり、すげえな、って思うことの方が多くてさ。今思えばそういうのも全部含めて



……憧れてたんだ」

苦しかった。追いかけて、手を伸ばしても触れられず。それなのに、心はシキを渴仰するのだ。  
「兄貴の凄さをさ、こう、見せ付けられるだろ？ そうしたらさ、陶酔、っていうのかな？ その瞬間は餓鬼のくせにすっかりのぼせちまってるんだ。——でもそれはいつか醒める。そのときの俺に残ってるのは、俺自身の非力さとか、内側の脆さなんだ」  
そしてシキは、気がつけばいつの間にか、リンの中の強さと弱さ、そのどちらの象徴にもなっていたのだ。

だからこそ、憎かった。

自分の全てになっていた、兄が。

「俺のなか、全部を埋め尽くしていた兄貴が憎ったらしくってさ、本当に大ッ嫌いだった。でも、やつぱりいつだって、最後には憧れてた。……馬鹿だよな」

もし——もしも分かり合うことが出来ていたら、自分たちはどういう形になっていたのだろう。そう考えることもある。

だがそれは、どうあっても無理だったのだとリンには分かる。

自嘲するようにくすりと笑った。だがアキラはそれに合わせて笑うようなことはなかった。

「トシマでさ、アキラから見た俺って、どんなだった？」

「どんな……って」

「単にさ、いきがってるだけに、見えなかった？ 俺は一人で何でもできるっていう顔で威張ってるくせに、本当は構って欲しくってたまんないのが見え見えで」

「……」

アキラの喉が鳴った。言葉にするには躊躇いがあつたようだが、肯定されているのだと感じた。「いいよ遠慮しなくって。コロシムでアイツにそんなこと言われたの、聞いてたよね？ 悔しいけどさ、昔から、寂しいのって駄目なんだよ……俺」

リンよりも少し低い場所にある、アキラの肩へ頭を乗せた。

「でもアイツは——」

一瞬、唇の端を噛み締める。

「兄貴はさ、はじめから『ひとり』だった——いや、『ひとり』で在ることを、自分自身で選び取っていた人なんだ」

あの雨の中、シキの刀の切っ先に揺るぎはなく、いままで見てきたどんなものより美しかった。それを自分へ向けられた時に感じた、圧倒的な存在感を思い出す。

「頭の中がアイツで埋め尽くされていた時も、俺はどこかでそのことを、分かっていたんだと思う」

自覚はしていなくとも、心の深い場所のどこかで。

「だから、追いかけてた」

どれ程憎しみに目が眩もうと、その過程には辛さだけが横たわっていようとも。だからこそひたすらに、自分があの孤高の背中を追いかけたいと願ったのだと、今なら思える。

「だけど、アキラと会って……約束貰って」

コンクリートの上に落ちているアキラの手のひらを探った。指先が触れ、優しく絡む。

「それでやっと、俺は本気でケリをつけたって、勝ちたいって思えたんだ。俺の全部になっていた——シキに」

そしてここへ、リンは戻ることが出来た。だから、例え結果論に過ぎなくとも、シキと兄弟という絆を持つて生まれたことを、今は恨んではない。

「……そうか」

アキラのもう一方の手が、夕日の色に輝いているリンの髪をさらりと撫でた。

「うん。ちゃんと、全部終らせたことだから」

肩へ預けていた頭を起こし、アキラの顔を覗き込んだ。きつく感じさせることの多いアキラの目許が、柔らく微笑んでいた。ただ自分の本音を語るといふのはやはり照れ臭く、誤魔化すように視線を逸らして頭を掻く。

今更なのかもしれない。それに恐らく、口にした言葉だけが全てというわけでもない。

だがそれでもリンは、シキに対して自分が抱いてきた感情をアキラへ告げて良かったと思う。形を持たない心の内に溜めた声も、噛み砕き、言葉にして紡ぎ出すことで、自分が何を思っていたのかを知ることができる。

そして何かにまた一つ、区切りをつけることができたのだろう。気持ち、というよりいまは、体自体が軽くなったように感じた。駆けることの出来ない体をその瞬間は忘れていた。

「俺も……」

小さく息を吸い込む音がして、言葉の頭が少し掠れたアキラの声がそれに続いた。思わず、視線を向ける。

「……俺の中でも、ずっと続いていた。トシマを出て、リンを待つて間——ずっと」

風が冷たく感じられる。だからコンクリートの上に無造作に置かれているアキラの上着へ視線を落とした。だがアキラは要らないと、首を軽く横へ振った。

「……ダメになりそうな時も、あったんだ。どんなに空を見上げて、星を眺めても……リンは、本当に帰ってくるのかって。でも俺は、信じたかった。もしかしたらいまこの瞬間、リンは俺を信じて頑張ってるかも知れないって、そう思ったから」

空を見上げ、アキラはぽつぽつと言葉を零す。途切れがちではあったけれど、その声はとても



真摯で、それ自体に熱さを感じた。

「だから俺も、負けれないと思った」

静かな言葉だった。だが力強い。その時にアキラが抱いたであろう決意そのものが籠っている。アキラがリンへ向き直り、二人の視線がぶつかった。自分もリンも、同じだったのだということ、ずっと繋がっていたということ、アキラはリンへぶつけていた。

「でもリンが俺の隣に立って、俺の元に戻ってきて……」

真剣なアキラの眼差しが、ふっと和らぐ。そして照れ臭そうに目許が笑んだ。

「それようやく、俺の中でも全てが——終わったんだ」

「……うん、そうだね」

胸が熱くて堪らなかった。アキラのせいだ。アキラの、言葉たちのせいだ。

「アキラ、ありがとう。俺を待っていてくれて。俺を……信じていてくれて」

心の底から溢れ出る想いをこめて、言葉を紡ぐ。絡めた指を引き寄せると、今告げた気持ちを吹きこむように、アキラの白い指先にそっと唇を押し当てた。厳かな気持ちだった。

「本当に、ありがとう」

静かに囁き、その短い感謝の言葉へ全てを籠めた。ありったけの自分の思いを口にして、泣きたいほど嬉しくて。少し涙が滲んでしまい、リンはすと鼻を吸って空を見上げた。

いつの間にか太陽は姿を消し、残照が西の空を濃いオレンジに染めていた。  
「空の色、すごくない？」

「……ああ。綺麗だな」

二人して空を眺めながら、絡めた指を遊ばせた。

どのくらいそうしていたのか分からない。だがコンクリートによく響く、徐々に二人へ近づいてくる靴音に、リンもアキラもそちらへ揃って顔を向けた。

静寂は、それを誰かの足音だと二人が意識する前に、すでに終わっていたのだろう。

「オッサンだな」

足音から特徴を読んだアキラが呟く。メシかなと軽く返した。

そして踊り場へと姿を現すより先に二人を源泉の声が呼んだ。それから僅かに間を空けて、薄暗い階段から源泉はゆつくりと姿を見せる。

「メシ、出来たぞ」

歩調と同じく間延びした声だった。

源泉が踊り場に足を掛けるかというところで、分かったとリンが答える。

二人を見つめ、一瞬源泉は動きを止めた。それから皮肉めかしてでもいるように片眉をくいと上げた。何が言いたいのだと声を張ろうとした瞬間、リンの指からアキラの指がするりと抜ける。

源泉はにやりと笑って振り返り、階段を下り始めた。

足音が聞こえなくなるのを待ってアキラをちらりと横目で見ると、アキラも同じようにリンを見ていた。

「……やっぱメシだった」

「みたいだな」

さっきまで触れていた指先には、まだアキラの指先の感触が残っていた。手のひらを握りこむ。そうすればその温かさを逃さずにいられるような気がした。

アキラは少しばつの悪そうな顔をしながら立ち上がり、リンへと手を差し伸べた。

「ありがと」

遠慮なくその掌を握る。右側へ体重を乗せながらリンは体を引き起こした。

腕をぐんと振り上げてそのまま伸びをするリンを、アキラがじっと見つめている。

「ん？ どうかした？」

「さっきの話——」

「どれのこと？」

「カメラ……また、やってみたらいいんじゃないか？」  
あはは、冗談でしょ。」

そう言おうとして、止めた。一方的な同情とか根拠のない慰めだとか。そんなものをアキラは持たない。きつとアキラは、本気でリンならそれが叶うと思っている。

他人にはそうは見えないのかもしれないが、リンの頭は案外とガチガチに固まり易いのだ。その辺りでは、アキラの方がよほど自分より柔軟なのかもしれない。……まあ、アキラも随分意固地な性質ではあるのだけれど。

空を仰ぐアキラの視線を追いかけた。天上はうつすらと群青を刷<sup>は</sup>りていた。

フェンスの外を眺めれば、街並みが夜の中で見るよりも濃い影となつて浮かび上がる。

それは、この一瞬にしか見えない光景。

「……うん。そうだね」

リンの言葉にアキラは満足げな溜め息を吐き、それから頷く。そしてゆっくり歩き出した。

アキラと手を繋いだまま、リンも一歩足を踏み出す。アキラはリンより数歩先を歩いていた。だが、手を引かれている気はしない。何の意識も気負いもなく、アキラの歩みはリンの歩調と重なっている。

それが嬉しくて、リンはアキラの手のひらを、強く握った。

不思議そうな顔をして、どうかしたのかと振り向くアキラに、なんでもないよと笑いながら。

end.